

## 第 22 話 攘夷の令と長州征伐

朝廷の威光が高まるにつれて、過激な攘夷論が盛んとなり、ついに攘夷の  
 実行となる。 ついで攘夷親征の議を決するが、忽ちその無謀を悟って、朝議一変  
 の結果、七卿の都落ちとなり、更に幕府の長州征伐となる。 仮条約の勅許。

### 毛利家の活動

薩摩の島津久光の公武合体論に対して、過激な尊王攘夷論を唱えてその中心となっていたのは、長  
 州の藩主毛利敬親とその世子元徳とでした。 思うに毛利家は、昔、関が原の役後、老獺な家康にたば  
 かれて、(先に「江戸幕府の創立」の話で述べておいた通り)領地を長門、周防の二カ国に狭められて以来、  
 よんどころなく徳川幕府に頭を下げてはいたものの、遺恨は骨髓に徹して忘れなかったのでしょう。 さ  
 れば、今や徳川幕府の実力が無くなり、日に日に威信が衰えていく時に、毛利家が起って尊王を唱え、  
 幕府を離れて攘夷を叫ぶのは当然のことなのです。

さて、敬親父子は、久光が勅使の護衛として江戸に下った留守の間に、しきりに攘夷論をもって朝  
 廷を説いて、ついに京都の形勢を完全に變化させた。 久光は江戸から帰ってこれを見ると、もはや到底自  
 分の意見の行われぬのを知って、不満の余り、忽々に薩摩に帰った。

そこで、京都は全く過激な攘夷論者ばかりとなったのです。

### 勅使の再東下

文久 2 年 10 月、朝廷は三條実美、姉小路公知を正副の勅使として江戸に下した。 護衛は土佐の  
 藩主山内豊範でした。 攘夷の決行および将軍の上京を促させたのです。 この時、将軍家茂は、これ  
 まで勅使を対等以下に待遇していた幕府の慣例を改めて、手厚くこれをもてなし、謹んでその命を奉じ  
 たので、これより朝廷の威光は一層高まり、政治の中心は次第に京都のほうに移って行った。

### 将軍家茂の上洛

明けて文久 3 年 3 月、家茂が勅命によって京都にのぼると、天皇はその 11 日に、将軍および諸大  
 名を従え、賀茂神社に行幸して攘夷を祈られ、ついで 4 月 11 日に、男山の石清水八幡宮に行幸、そ  
 の祠前で攘夷の節刀を家茂に賜ることになったが、其の日、家茂は病と称して供奉を辞し、その代理  
 を勤めさせた一橋慶喜もまた、山の中腹で俄かに病となって、参拝せずに京都に引き返した。 志士ら  
 は大いに憤慨して幕府の卑怯を罵り、三條橋畔の高札場に貼紙して、天誅を家茂らに加えんと恐嚇  
 するに至った。

### 攘夷実行の期日

そこで、家茂も止むを得ず、ついに 5 月 10 日をもって攘夷の期日とすることに定めて、これを朝廷  
 に申し上げ、又、諸大名にも通知した。 しかし、勿論幕府は、実際には攘夷の出来ないことを十分に知

## 第22話 攘夷の令と長州征伐

っていたのです、わづかにその日をもって、ともかくも開国拒絶の談判を諸外国の公使と始めることにするというくらいの意味であったのです。それで、その奏上の文句も、  
攘夷期限之事、来五月十日無相違拒絶決定仕候間、及奏聞候猶列藩へも布告可致候事。

四月二十日

家茂

というのでして、諸大名への命令には、「右の心得をもって、自国の海防禦筋いよいよ以って嚴重に相備え、襲い来たり候節は掃攘いたし候様いたさるべく候」と、明らかに襲い来たり候節はと言ひ添えてあったのです。

### 長州藩の外国船砲撃

ところが、いよいよその日が来ると、攘夷派の急先鋒をもって任じる長州藩は、わざとその命令を正解しないで、折から、下関海峡の東口に来て停泊していた米国商船を砲撃したのを手始めに、23日には仏国船を砲撃して、26日にはオランダの軍艦を砲撃し、後またアメリカ及びフランスの軍艦とも交戦した。

### 生麦の変の後始末

この頃、薩摩藩もまたイギリスの軍艦7隻と戦ったが、これは、さきに久光が勅使を護衛して帰途に向った時に、神奈川の生麦村で、イギリス人が馬上でその行列を犯したのを従士が怒って、その一人を斬り、三人を傷つけた所謂生麦事件の変の始末をつけるために、英国代理公使が武力をもって談判に来たのを、薩摩藩がその要求を聴かずに砲火を加えたのです。

しかしそれはともあれ、薩長の二藩が既に外国船を砲撃して、頻りに勝利を得たとの知らせが、相次いで京都に達すると、攘夷論者の意気は大いにあがった。そこで長州藩主毛利敬親が朝廷に攘夷親征を請うと、三條実美らの公卿がこれに賛成して、ついにその年の8月、天皇が大和に行幸になり、神武天皇の御陵に参拝し、暫時の逗留で親征の軍儀を起こされることに朝議が一決した。

### 8月18日の政変

ところが、この攘夷親征の議は、その実、倒幕、即ち幕府を討って倒すのを目的としたものである事が分かったので、公武合体の温和論を主張する薩摩の藩士らはこれを悦ばず、密かに会津藩主松平容保と謀り、中川宮（青蓮院宮尊融法親王が文久3年正月に還俗されて中川宮朝彦親王と申上げる）及び温和派の近衛忠照、二條齊敬らの公卿に攘夷派の陰謀を告げたので、やがて中川宮の奏上となり、朝議は俄かに一変して、大和の行幸をやめ、長州藩の皇宮守衛の任を解いて薩摩藩をもってこれに代え、常に長州藩と謀りことを通じていた三條実美、三條西季知、東久世道禧、壬生基修、四條隆謨、錦小路頼徳、澤宣嘉ら七卿の参内を停められた。実に文久3年8月18日の事です。

### 7卿の都落

在京の長州藩士が大いに憤慨したのは言うまでもない。彼等はその夜を徹して評議を凝らしたが、すでに公武合体派が宮中に勢力を占めていたので、もはやいかんともしようがなかったので、結局、7卿

## 第 22 話 攘夷の令と長州征伐

を奉じて帰国することにした。そこで、7 卿は初めて草鞋を穿き、蓑笠を着け、19 日の朝、夜の未だ明けない前に、折からの雨を冒して京都を立った。世にこれを 7 卿の都落と言います。

後に、朝廷は 7 卿の官位を削り、敬親父子および長州藩士の入京を禁じた。こうして、長州藩を中心とした過激な攘夷論は全く挫け、公武合体を主張する薩摩藩が俄かに勢力を得るに至った。

### やまと と つがわ へん 大和十津川の変

このころ、諸地方にもまた攘夷論者の活動がいくつかあった。天誅組と称した備前の藤本鉄石、土佐の吉村寅太郎、三河の松本奎堂、宍戸昌明らの浪士の 1 団は、攘夷親政の先駆をしようと志して、侍従中山忠光を奉じて大和に入り、8 月 17 日に、先づ五條の幕府の代官鈴木源内を斬って血祭りとしたが、忽ち朝議の一変を聞いて、大いに失望しつつも、十津川の山の奥に拠り、紀伊、彦根、その他諸藩の兵と戦って、ついに敗死した。忠光は遁れて大阪に走った。

### たじまいくの へん 但馬生野の変

又、志士平野国臣（福岡藩士）は、朝議の一変と共に山陰道に遁れ、7 卿の 1 人の澤宣嘉を奉じて、兵を但馬の生野に挙げたが、出石、豊岡などの藩兵に攻められて破れ、宣嘉は辛くも遁れて長州に走り、更に伊予の小松に身を隠したが、国臣は捕らえられて、後に斬られた。

### つくば へん 築波の変

水戸では、斉昭の薨後、久しく天狗党と書生派との 2 つに分かれて相闘いでいたが、大和や但馬の挙兵の翌元治元年 5 月、天狗党、すなわち攘夷派の藤田小四郎（東湖の子）が檄を遠近に飛ばして同志を集め、兵を築波山に挙げて、しばしば幕府の討手を悩ました。しかし、後、ついに敗れ、首領の武田耕雲齋は小四郎と共に、残兵を率いて京に上ろうと志し、途を中山道に取って、行く行く沿道諸藩の兵を破って越前に入ったが、寒さと飢えとに苦しめられて、加賀藩に降り、翌慶応元年 2 月、幕命によって敦賀で斬られた。時に耕雲齋は 63 才、小四郎は 24 才でした。

こうして、率先して尊王の大義を唱えた水戸藩は、藩内の軋轢のために有為の人物が皆倒れて、ついに維新の大業に参与することが出来なくなってしまったのです。

### しょうぐんいえもち さいど じょうらく 将軍家茂の再度の上洛

さて、将軍家茂は、文久 3 年 6 月、一旦江戸に帰ったが、8 月に朝議が一変すると、島津久光が上京して、公武合体の実を挙げるために再び将軍を上京させるようにと奏上したので、召されて、翌元治正月、再び入京した。今度は温和な公武合体派が朝廷に勢力を得ていたもので、この前とは違い、非常に厚遇を賜った上に、無謀な攘夷などはせず、十分に軍備を充実して、上は列聖の威霊を安んじ奉り、下は万民の安堵を図るようにせよ、という意味の勅りをすら下された。

### ちやうしゅうはん ぎょうそ 長州藩の強訴

一方、長州藩は、先に皇宮守衛の任を解かれてから、藩主はしばしば上書して罪を謝し、7 卿は連名

## 第22話 攘夷の令と長州征伐

の嘆願書を認めて朝廷に差し出したが、いづれもお赦しにならなかった。 ついに元治元年6月、長州藩の家老福原越後、国司信濃、益田右衛門介らは兵を率いて上京し、嗟峨、伏見、山崎に陣して、藩主親父子の無実の罪を訴えて、三條実美らの脱走の罪を赦されんことを請うた。

すでに兵力を備えての嘆願ですから、聞き届けなければ戦争になるにきまっていた。 そこで、公卿や在京の諸藩の多くは、長州藩の嘆願が容れられることを望んだが、折から、将軍家茂と共に入京していた一橋慶喜および京都守護松平容保は、兵力をもっての強訴を赦しては、朝廷は威光を墜し、幕府は面目を失い、後日に悪例を残すことにもなると、固くこの議に反対した。

### 蛤御門の変

そこで、朝廷は慶喜から家老福原越後に対して、兵士を還して後日の沙汰を待つようにとの命令を伝えさせた。 しかし、長州兵士はこれに従わなかったのみならず、ついに松平容保を除くを名目として、道を分けて京都に進んだ。 7月19日、慶喜は会津、桑名、薩摩、越前、彦根、大垣などの諸藩の兵を督して、これを防いだ。 戦いは所々に起こったが、中でも蛤御門の戦いが最もはげしく、弾丸がしばしば宮中にまで飛来たほどでした。 しかし結局、各方面ともに長州勢が敗れて、越後、信濃、右衛門介らの家老は遁れて長州に走り、久阪玄端、木島又兵衛らは戦死し、真木和泉らは天王山に登って自殺した。 世にこれを、蛤御門の変、又は元治の変と言う。

### 征長の勅命が下る

朝廷は、長州藩がみだりに宮門に迫って兵火を開いた罪を責めて、すなわち敬親父子の官位を削り、朝敵として追討の命を幕府に下した。 そこで、幕府は尾張の前藩主徳川慶勝を征長総督として、阿波、薩摩、安芸などの21藩の兵を率いて、海陸から長門、周防を攻め伐たせることにした。

### 四国連合艦隊の下関砲撃

この時、たまたま米、仏、英、蘭の四国連合艦隊が、17隻で下関を襲った。 実に福原越後らが敗れて帰った翌8月の事です。 前年の5月に長州藩がみだりに外国船を砲撃した事に対する処分を、幕府がいつまでもぐずぐずしているのに業を煮やして、彼等が自ら鷹懲しようとして横浜から廻航して来たのです。 長州藩士は死を決して応戦したが、とても敵しないことが分かったので、ついに和を講じた。 これより藩の識者らは攘夷が行われ難いことを知って、専ら力を尊王倒幕に注ぐに至ったと言われる。

### 第一回 長州征伐

幕府の征長の軍は11月に国境に迫ったが、この時、長州藩では恭順党が勢力を得て主戦党を退け、総督慶勝の指示した条件に従い、さきに兵を京都に進めた三家老を斬ってその首を献じ、藩主父子は萩に退いて、謹慎して罪を謝すことにした。 そこで慶勝は、命じて山口城を破棄させて、三條実美らを福岡藩に移して、翌慶応元年正月、一兵も交えずに凱旋した。

### 幕府の不満と長州藩論の急変

## 第 22 話 攘夷の令と長州征伐

ところが、久しく長州藩の人もなげな跳梁振り<sup>ちょうりょうぶ</sup>を憎んでいた幕府は、総督慶勝<sup>よしかつ しょうち かんたいたす</sup>の処置が寛大過ぎるとし、更に使いを長州に下して、実美<sup>さねとみ</sup>ら並びに敬親父子<sup>たかちか</sup>を江戸に護送<sup>ごそう</sup>するように命じた。若し<sup>も</sup>応じなければ再び兵を差し向けるぞといったのです。ところが、この時すでに長州藩は、奇兵隊<sup>きへいたい</sup>の高杉晋作<sup>たかすぎしんさく</sup>、山縣有朋<sup>やまがたありとも</sup>らの主戦党が兵力で反対党を倒して、飽くまでも幕府に反抗しようということに態度を一変した後だったので、幕府の命令に随<sup>したが</sup>わなかった。

そこで、将軍家茂<sup>いえもち</sup>は親しく軍事を督<sup>とく</sup>するために、慶応元年 5 月 16 日、江戸城を発して上京し、閏 5 月 21 日に参内して、長州征伐に関する勅語<sup>ちよくご</sup>を拝し、その 25 日に大阪城に入って、いよいよ長州再征の軍儀<sup>さいせい ぐんぎ</sup>に移ることになった。

ところが、思いもかけない問題<sup>とっばつ</sup>がここに突発<sup>き</sup>して、しばらく長州問題を議<sup>ぎ</sup>してはいられなくなった。

### 仮条約の勅許

これより先き、幕府は安政 5 年に結<sup>むす</sup>んであった仮条約<sup>かり ちやく</sup>に基づいて、その翌年に神奈川、長崎、函館の三港を開いたが、他は延期<sup>えんき</sup>していた。それで、諸外国の公使<sup>こうし</sup>は、しばしば幕府に対して他の開港<sup>うなが</sup>をも促したが、幕府は内部<sup>ないぶ</sup>では攘夷論が盛んで、それどころではなかったの、いつも要領<sup>ようりょう</sup>を得ない返答<sup>へんとう</sup>をしていたのです。そこでこの年 9 月、英・米・仏・蘭の四国公使が軍艦 9 隻を率いて兵庫に入港して、大阪城の家茂<sup>いえもち</sup>に迫って、仮条約の実行を求めたのです。もし将軍がこれに応じなければ、彼等も京都にのぼって、直接<sup>ちよくせつ</sup>朝廷<sup>せいぎゆう</sup>に請求<sup>せいきう</sup>するとも言った。

そこで、家茂<sup>いえもち</sup>は開港の止むを得ない所以<sup>えん</sup>を述べて、切に仮条約の勅許<sup>ちやくせつ</sup>を奏請<sup>そうせい</sup>したので、朝廷も 10 月 5 日をもって、ついにこれをお許しになり、ただ兵庫の開港だけは差し止められた。(しかし後、慶応 3 年に至って、これも許された。)

### 薩長の連合

こうして、約半年後の間も、再征の軍儀が進まなかったうちに、長州藩は着々と準備を整<sup>ととの</sup>えたのみならず、土佐の浪士坂本龍馬<sup>ろうしきかもとりゆうま</sup>、中岡慎太郎<sup>なかおかしんたろう</sup>らの奔走<sup>ほんそう</sup>で、薩摩藩との間に連合の密約が出来た。過激な尊王攘夷論と温和な公武合体論とにわかれて、久しく不和であった 2 大藩が、これより一致協力<sup>いつちきょうりよく</sup>して幕府を倒そうとしたのですが、勿論<sup>もちろん</sup>、朝廷も幕府もこれを知らなかったのです。

### 第二回 長州征伐

幕府の再征の準備が出来たのは翌慶応 2 年になってからです。即ち、その正月に、漸く長州藩の処分<sup>すなわ</sup>を決して、敬親父子<sup>たかちかふし</sup>に蟄居<sup>ちつきよ</sup>を命じ、毛利家の封地<sup>ふうち</sup>十萬石を削<sup>けづ</sup>ることとして、5 月にその命を伝えたが、もとより長門藩がこれを承服<sup>しょうふく</sup>する筈<sup>はず</sup>がなかった。断然<sup>だんぜん</sup>、其の宣告<sup>せんこく</sup>を拒絶<sup>きよぜつ</sup>して、明らかに敵対<sup>あき</sup>の意を表した。そこで、幕府はいよいよ紀伊藩主徳川茂承<sup>もちつぐ</sup>を総督として、再び諸軍に進撃の命を發した。しかし薩摩藩が再征の無意味を名目として出兵を拒絶したのをはじめ、幕府の命<sup>おも</sup>を重んじないものが多かったの、一向に軍気が振るわず、水陸共に利<sup>すいりく</sup>を失<sup>り</sup>う<sup>うしな</sup>って、ついに長州領内<sup>りょうない</sup>には 1 歩も進めなかった。

## 第22話 攘夷の令と長州征伐

### しょうぐんいえもち こうきよ よしのぶ しょうぐんしゅうしよく 将軍家茂の薨去と慶喜の将軍就職

たまたま将軍家茂が僅か 21 才をもって大阪城に薨じ、  
慶喜が立ってその後を継ぐことになると、彼は朝命を仰いで、  
休戦を長州藩に諭し、征討の軍をかえしたが、これより幕府の実力のないことが世に知れ渡って、その命令も行われ  
ないようになった。慶応 2 年 12 月 5 日、慶喜は正二位権  
大納言に叙され、征夷大將軍に任ぜられて、第十五代将軍  
となった。時に年は 30 才でした。彼はこの時、「家康公  
は国家のために幕府を開かれたが、自分は幕府を葬るため  
に将軍に就くのだ」と言ったといわれる。



十五代将軍 徳川慶喜

すでに幕府の威権が全く地に墜ちて、余命の幾許もないことを熟知しながら、なお且つ大責任の  
地に立たなければならなかった彼の心中は、蓋し悲壮なものであったでしょう。

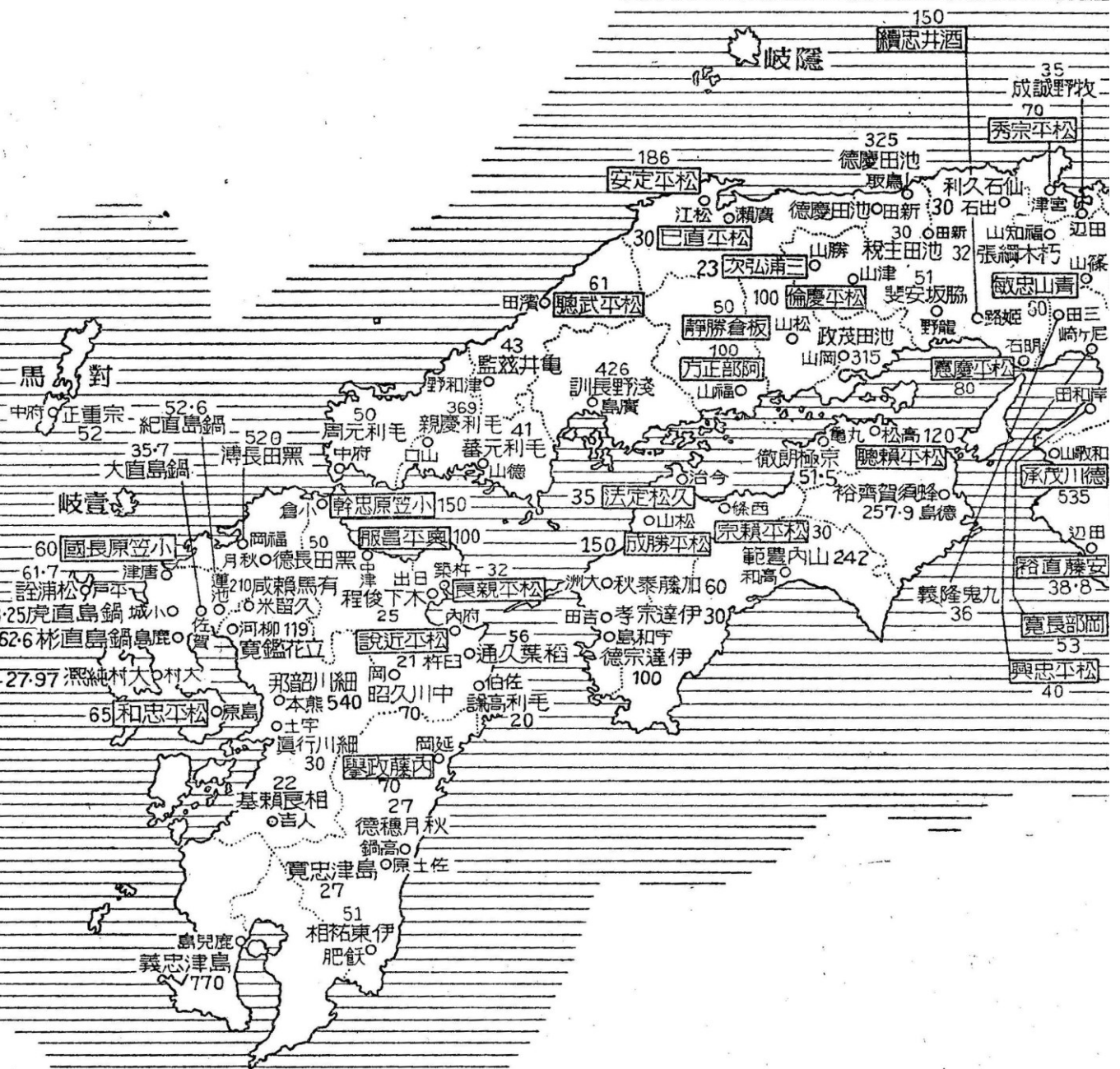
### こうめい ほうぎよ 孝明天皇の崩御

ついでこの月 25 日に、孝明天皇は痲瘡をお病みになって、俄かに崩御された。御年 36 才でした。  
天皇は、御年若くして御位に即かれてから 21 年の間、あだかも内外頗る多事の時に当たられ、1 日 1 夜  
として御心を安める暇もなかったのに、今や朝廷のご威光は年毎に加わり、将に王政復古の大業も成就  
する時になって、忽ちお崩れになったのです。かえすがえすも口惜しい次第です。

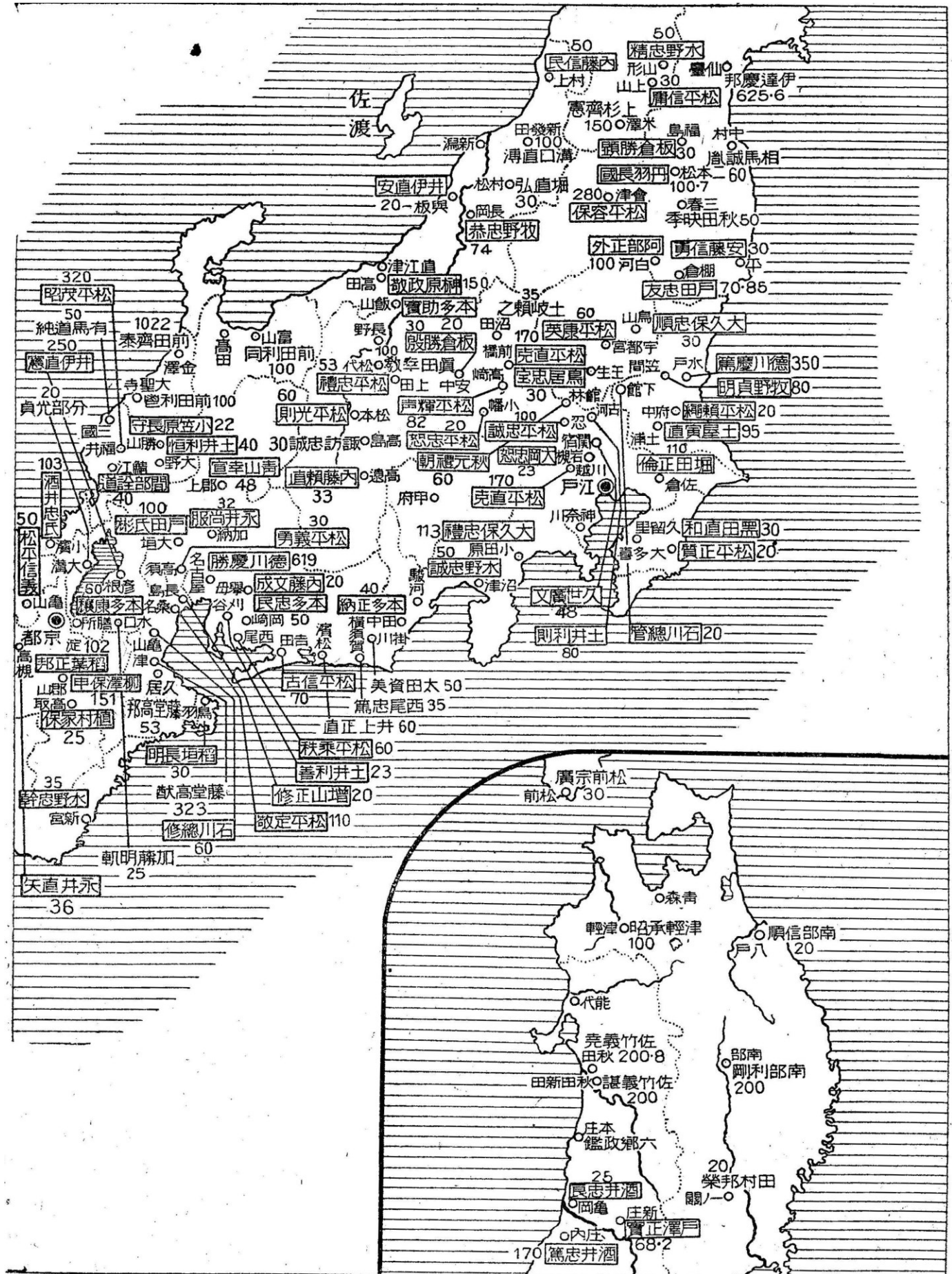
# 慶應元年諸大名配置図

(石千位単)高石は字數 名大様外は他其 名大代譜及藩親は□

(のものな要主の上以石万二)



けいおう 慶應元年 諸大名の配置図



( 二万石以上の主要な藩 □は親藩および譜代大名 他は外様大名 )

孝明天皇の御仁徳

孝明天皇は、かつて外交の騒がしかった時に、勅使を伊勢に遣わせて、御宸筆の願文を神宮に奉



## 第 22 話 攘夷の令と長州征伐

て、国難を救わんことを祈らせられ、勅使が京都に帰るまで、毎夜お庭に出て、神宮を遥拝された。又、常に万民を哀れみられ、嘗て物価騰貴の折に、ご不自由なお手許金の中から金 50 枚を下し賜いて、山城国内の貧民を救われた事もある。

ぬばたまの夜すがら冬の寒きにも つれて偲ぶは国民のこと  
という御製にも、ご人徳の一旦は拝察されるが、又、外国船の渡来を憂えて、  
朝夕に民安かれと思ふ身の 心にかかる異くにの船  
と詠まれています。

( 第 22 話 攘夷の令と長州征伐 終わり。 次は前頁に戻り、第 23 話 大政奉還 に )